

私は今年3月28日に満70歳となり古希（古くは数えですが）を迎えました。その前後に前々から行きたいと思っていました、京都の桂離宮・修学院離宮・仙洞御所等と奈良の高松塚古墳・キトラ古墳の特別公開に行って来ました。

京都と奈良は大学時代日本文化研究会に属していましたので、それぞれ20回以上訪問していますが、上記の御所と古墳は予約制で、なかなか日程が合わず行く機会を逸しており、念願の見学場所でした。今年の1月にインターネットで予約をしたところ、3月15日10時半に桂離宮・3月16日10時半に修学院離宮・5月17日13時半に仙洞御所の1時間の見学許可がとれました。当日の枠もありますが、旅行の予定を立てるのが難しいので予約としました。一方奈良の高松塚古墳は仙洞御所に行く5日前に、5月18日10時の特別公開の入館許可が偶然とれ、キトラ古墳は高松塚古墳見学の後ぶらっと寄ったところ、こちらも特別公開中で、ラッキーなことに当日枠で入館出来ました。

京都は名園が多く、見学の中心は庭となります。仙洞御所は第108代後水尾（ごみずのう）天皇が明正天皇に譲って上皇になった時に初めて御所内に上皇の居所として造られました。後水尾天皇は江戸幕府との確執はありましたが、皇后は徳川秀忠の娘の和子で、実力天皇であり、一方風雅に通じていました。仙洞御所の初期の



仙洞御所 南池

庭は茶人小堀遠州の作庭です。南池は二つの中島があり、大変美しい佇まいで、桜・つつじ・藤・紅葉の四季折々の花と木々が楽しめます。今回は青葉がさわやかでしたが、庭を眺めながら、池を渡る涼風に上皇の風雅が伝わってきましたので、一句

『仙洞池（ち）涼風つたう 水尾え（水の上）』



修学院離宮 浴竜池西浜

又上皇は別荘として修学院離宮を造りました。上中下の高さが異なる庭がそれぞれ美しく、世界一の回遊式日本庭園と思います。3月16日予約で13時に4回目の訪問となった西芳寺（苔寺）の庭同様に世界遺産に登録出来る景觀です。西芳寺の庭と異なるのはこの離宮の庭は京の街と比叡山を借景で雄大な景觀を有しているところです。一方庭の隅々まで繊細な工夫がなされており、四季折々の花も楽しめます。当日は梅の花が残っており、平和な日本をしみじみ感じられました。それで1句

『修学で 洛中望む 永久（とわ）の春』

仙洞御所の見学の後（5月17日夕方）、上皇が特別に造らせた山荘がお寺になった圓通寺に行きたくなりました。地下鉄で終点の国立京都国際会館まで乗り、北大路駅行きバスで4つ目の圓通寺道で下り、5度目の参観をしました。比叡山を借景にして、今回も又心が和み、1句

『圓通寺 和む比叡の 山若葉』



圓通寺 比叡山の借景

後水尾上皇は久しぶりに上皇制度を復活し、文化面では後世に残る仙洞御所・修学院離宮・圓通寺の庭の遺産を残した天皇で、昭和天皇の次の長寿で85歳まで生きました。子供4人が約60年間5代徳川綱吉の時代まで連続して4代の天皇を継承しており、歴代で一番幸せな天皇ではなかったかと思います。

一方奈良ですが、奈良は仏像と塔が好きで、殆どの寺院を訪れています。仏像では薬師寺の薬師如来・秋篠寺の伎芸天・興福寺の阿修羅が好きです。塔は当麻寺の東西の塔・室生寺の塔・法起寺の塔が印象的です。古墳は箸墓古墳以外は余り熱心ではなかったのですが、5月18日特別公開で高松塚古墳とキトラ古墳を連続



高松塚古墳外観

で見る機会を得られ大変ラッキーでした。奈良は交通手段が限られており、飛鳥駅に降りて直ぐ電動の自転車をレンタルしました。初めて乗りましたが、機能的で頼りになりました。5分で飛鳥歴史公園館に着きました。



高松塚古墳 西壁女子群像

高松塚古墳の東西南北と天井の壁画は、空気に触れカビが発生して色彩が劣化している為特別な修理作業室を飛鳥歴史公園館の隣に整備し、カビ取り作業が行われており、年2回特別公開を行っています。たった10分間ですが、今回は西壁女子群像・東壁青龍・北壁玄武(蛇と亀)の壁画の本物を窓越しに見えて感動しました。

1300年前の壁画は色彩が不鮮明ですが、女子群像等から当時の文化が突然目の前に広がったのです。7世紀から8世紀初めに建造されたこの古墳の壁画は奈良橿原考古学研究所の調査により、1972年3月に発見され、当時はこの歴史的発見に古代への夢が大きく広がりました。それから大切に保存されて45年、残念ながら古墳内の温度・湿度の変化からカビが発生して、古墳の石ごと切取り、温度20度湿度55%の特別修理室に移設保管されています。元々中国の思想で、東西南北に4神『東一青龍・南一朱雀・西一白虎・北一玄武(蛇と亀)』と天井に星座が描かれ東西には男子・女子の群像がそれぞれ描かれています。鮮明な4神の壁画は日本で初めての発見でした。



高松塚古墳 北壁玄武像



キトラ古墳外観

第42代文武天皇陵を挟んで南側のキトラ古墳は、1983年盗掘孔からファイバースコープで北側の玄武（蛇と亀）が確認されました。そして2001年までに次々に青龍・白虎・星座・朱雀の壁画が発見されましたが、劣化を防ぐ目的で2004年から2010年にかけて壁画と取り出し保管するようになり、昨年201

6年9月壁画保存施設が開設されました。

キトラ古墳は高松塚古墳より10年程度古い古墳と言われています。キトラ古墳の今回公開された東壁の青龍は中央に龍の頭と足の一部がかすかに見える程度でしたが、やはり本物を見ると飛鳥文化が心に蘇ってきます。両古墳の被葬者は学説が分かれており、天武天皇の皇子が大豪族安倍氏の首長が有力です。



キトラ古墳石室展示模型

両古墳の北3-4kmの地点には天武天皇・持統天皇陵があります。第40代天武天皇は、壬申の乱で、兄である第38代天智天皇の息子の第39代弘文天皇を自殺に追い込んで、天皇の位につきました。皇太子の草壁皇子が夭折した為皇后が第41代持統天皇として継承しその後、孫の皇子が若くして文武天皇となりました。文武天皇を補佐したのが、叔父である天武天皇の長男高市皇子と4男忍壁皇子です。キトラ古墳と高松塚古墳は南北から文武天皇陵を守っているように見えますし、両古墳が双子のように似ている内装から被葬者は同じステータスの貴人が自然と思われ、壬申の乱と一緒に戦った高市皇子（キトラ）と平和になって大宝律令制定に貢献した忍壁皇子（高松塚）説を個人的とりたいと思います。その後天武天皇系の血統をひ孫の聖武天皇を含めで守ってきましたが、結局天智天皇系の血統に戻ってしまいました。良き伝統は守るべきものですが、真の伝統は自ら時代を超越する力があるのです。天武天皇の皇子を埋葬する両古墳の遺産が時代を超えて昭和の時代に蘇ったと思います。最後に両古墳の天井壁に精密に描かれた星座が印象的でしたので、一句

『飛鳥墓 夏星探す 古希の旅』

以上 古希を記念して